日本香港協会は、設立20周年を迎えました。

飛 FLYING DRAGON 龍

日本香港協会ニュース …… No.59

日本香港協会 20th Anniversary 1988-2008

普通の暮らしの上空を飛行機が通る　©小柳 淳

啓徳空港閉港10周年

九龍市街地にあった名物空港「啓徳機場」が1998年に閉港してから、この夏で10年が経ちました。それまでの香港啓徳機場への到着は、まるで林立するビルの森に落ちてゆくような思いをしたものでした。市街地上空で右45°にカーブし最終着陸コースに入るころには、右翼端が古い灰色のビル群にぶつかるのではと思えるような低空を降下し続け、建物の中まで見えるくらいに地上に接近していました。空港敷地を区切る金網のすぐ外は密集した市街地が接していて、そこでは上空を数分毎にジェット旅客機が通過する、日常の暮らしと天から次々降ってくる爆音が同居しているという理解しがたい風景がありました。

かつて香港に赴任、在住、旅行をした人にとっては、啓徳機場到着が印象深い香港第一歩だったと思います。航空ファンの間でも名高い空港で、ビル群の中に降下してくる旅客機の姿をカメラに収めたり、「香港カーブ」といわれた着陸直前の右旋回を山側からずうっと眺めたりした人も多かったと思います。

この市街地空港がなくなって10年。そして、同時に香港新空港の開港から10年。もはや香港の若者にとって、ビルに囲まれた啓徳機場は歴史上のお話でしかないのかもしれません。新空港は啓徳よりは遠くなりましたが、都心を結ぶ交通機関のスピードも種類も充実していて、啓徳時代と変わらぬ便利さといえるほどです。多くの旅行者から賞賛され、世界のベストエアポートに何回も選定された、香港の玄関に相応しい新空港です。　　**広報委員　小柳 淳**

（5ページに関連記事）

目　　次

2008年8月発行

「香港・深圳：融合に向かう中国の近未来都市」セミナー …… 2・3
沖縄日本香港協会が発足 …… 3
対談　香港、言いたい放題！　久末亮一 vs 武田信晃 …… 4
啓徳空港の想い出 …… 5
北京五輪　香港で開催される馬術競技 …… 6
夙川 優のドラゴンボートレース参戦記 …… 7
支部便り　関西
　CMMS第5期修了式 …… 8
　第1回経済セミナー開催
　Ny・lon・kong　世界の注目を浴びる香港とその活用法 …… 9
支部便り　中京
　香港ビジネスセミナー（夏季）開催報告について …… 10
支部便り　福岡
　目指すは「アジアの交流拠点都市・福岡」／福岡支部理事会・通常総会開催／「香港から観る中国の変貌2008年」講演会開催 …… 11
支部便り　山形
　地方観光地再生への取り組み …… 12
支部便り　北海道
　初夏の札幌を彩るYOSAKOIソーラン祭りのご紹介 …… 13
支部便り　宮城
　2008年度総会・記念セミナー　そして祝賀会を開催／広東語教室を始めました／YOU・YOUクラブ発足、春の花見イベント・新緑のゴルフコンペを開催 …… 14
香港街角歩き …… 15

「香港・深圳：融合に向かう中国の近未来都市」セミナー

香港貿易発展局と深圳市貿易工業局は、日本香港協会他23団体のご後援のもと、7月16日(水)ホテル・オークラのオーチャード・ルームにて、掲題のセミナーを大々的に開催致しました。一体化に向かう香港と深圳をテーマとした本セミナーは、首都圏のビジネス界のみならず学術界からも大きな注目を集め、応募者が450名、参加者が400名を超えるなど大盛況のうちに幕を閉じました。香港関連のビジネスセミナーとしては、ここ数年で最大級のイベントであったと思われます。

400名を集め満員御礼の会場

日本経済研究センターの調査で3年連続潜在競争力No.1に認定され、中国政府の第11次五カ年計画においても重要な役割を担い進化を続ける香港と、香港に隣接した経済特区として中国経済の先頭を切って驚異的な発展を遂げている深圳の間では、香港政府により両都市の国際空港間を高速鉄道で結ぶ構想が発表されるなど、緊密度を深め一つの都市圏として発展して行こうという機運が高まっています。香港と深圳間の障壁がこれまで以上に低くなることにより、世界屈指のビジネスインフラを供給する香港の対中国進出の際の橋頭堡としての役割は更に高まるものと推察されます。

このような状況を踏まえ、セミナーでは、冒頭に香港貿易発展局の古田茂美日本首席代表より開会の挨拶があり、後援団体を代表して日本貿易振興機構（ジェトロ）の鷲尾友春理事からの祝辞の後、香港貿易発展局のクリス・ジャクソン副総裁と深圳市貿易工業局の王暁春副局長より、「創造産業と先進技術産業の中華圏ハブとして注目を集める香港と深圳」と題し、香港・深圳それぞれの優位性と最新情報を交えた基調講演がありました。中国返還11年目を迎え、アジアのビジネスセンターとして大きく進化する香港と、1980年代には人口僅か3万人の漁村でありながら、積極的な外資企業の誘致により驚異的な発展を遂げ、人口860万人の大都市に生まれ変わった深圳の変貌ぶりには、参加者一同驚きを禁じ得ない様子が窺われました。

講演する香港貿易発展局クリストファー・ジャクソン副総裁

二都市間の往来については、「一地両検（本来2度に亘る出入境を1箇所に集約）」が実現した結果、1日平均の越境者が1万人から6万人の水準にまで増加、特に香港居住民の入出境は指紋と顔写真の照合のみで済むようになったため、所要時間が5秒にまで短縮されたこと、1日22台だった両都市間のトラック通行が今では2000台以上となったというエピソードが紹介されました。

続いて、株式会社角川グループホールディングスの角川歴彦会長兼CEOより、「日本発創造産業の香港を活用した中華圏事業戦略～角川グループ南進北上の狙い」と題しまして、同社の実際の取り組みを踏まえた事例紹介がありました。同社は、香港の華人財閥新華グループとのパートナーシップや、CEPA（中国・香港間の経済貿易緊密化協定）活用による深圳蛇口のシネマコンプレックス設立、香港の知的財産保護システムによる商標・著作権対策の実践、更には香港の関係会社を香港株式市場に上場することによる資金調達と、香港の持つ優位性をフルに活かしたアジアの事業展開を図っています。更に同氏は、インターネット動画サイトの普及などにより、日本発コンテンツへの関心が世界中に広まっていることを指摘、今後も中国本土やアジア市場への玄関口としての香港の優位性を強調しました。アジア全域に跨る巨大な中華圏市場攻略に当たり、同社の取り組みは日本のビジネス界を勇気づけるとともに、大きなヒントを与えたものと思われます。

コーヒーブレイクを挟み、第二部のパネルディスカッションでは、ベストセラー「進化する香港」の著者で2度に亘る香港・華南シンクタンクミッションに参加した丸紅経済研究所チーフアナリストの猪本有紀氏がモデレーターを務め、基調講演の3名のスピーカーの他、野村資本市場研究所シニアフェローの関志雄氏、TDK株式会社ネットワークデバイスビジネスグループゼネラルマネージャーの倉田透氏、華為技術日本株式会社東アジア政府担当事業部長の程肇氏が登壇しました。先ず始めに、関志雄氏が香港･マカオを含む汎珠江デルタ地域の「雁行形態論」的発展についてマクロなプレゼンテーションを実施、続いて倉田氏が同社のグローバル事業展開において、香港サイエンスパークをハードディスク製造に必要なキー素材である磁気ヘッドの研究開発拠点として活用していることに触れ、香港のみならず中国大陸や世界中の優秀な人材を集めら

パネルディスカッション風景

れる利点を高く評価していると述べました。

程氏は、深圳において1988年に設立され、瞬く間に世界トップクラスのIT企業に成長した華為社の事業展開と、IT先進地域である香港の市場としての魅力や機能について解説しました。セミナーの核心である、「二都市の融合」については、角川会長からのコメントに代表されるように、ビジネス的見地からは期待と不安が入り混じっていることが窺われましたが、深圳の王副局長による「融合に向けての課題はあるが方向性は確実である。政治なら北京へ、現在のビジネスなら上海へ、未来志向のビジネスを追求するなら発展の余地がある香港・深圳へお越しいただきたい。」という発言が聴衆を惹きつける結果となりました。学術的・実践的・政策的な意義深いやり取りがフロアを盛り上げた結果、30分以上のタイムオーバーとなりましたが、来場者にとっては満足度の高いセミナーになったものと思われます。

今後とも、日本香港協会では、香港貿易発展局との連携を深めつつ、法人会員を始めとして協会会員の皆様に有用なビジネス情報の提供をするためのセミナーやシンポジウムを共同企画・共催・後援して参りますので、是非ご期待下さい。

沖縄日本香港協会が発足

設立総会でご挨拶される國場会長

2年前に宮城日本香港協会が設立されましたが、今年5月23日には那覇市のホテル日航那覇グランドキャッスルにて、沖縄日本香港協会が正式に発足致しました。沖縄・香港間の定期航空便が本年4月に就航したのをきっかけに、沖縄県と香港の相互理解を深めて友好を促進する大きな架け橋となり、文化及び交流に資することを目的に同協会は設立されました。会長には沖縄最大のコングロマリットである(株)國場組の國場幸一社長が就任されました。國場会長は、沖縄県商工会議所連合会会長、那覇商工会議所会頭、そして中琉協会会長などの重責も担っていらっしゃいます。沖縄日本香港協会は設立間もないですが、すでに58団体の法人会員と4名の個人会員があり、理事には沖縄の主要産業団体の代表者が名を連ねており、経済界からも強力な支援をしていただいております。

設立総会では日本香港協会の財前理事長が祝辞を述べ、2008年度の事業計画案（香港貿易発展局や県産業振興公社香港事務所との連携、香港関連の講演会や物産展の開催協力など）や収支予算案が承認されました。設立総会後の記念祝賀会では、来賓として香港貿易発展局日本首席代表の古田茂美氏、沖縄県副知事の安里カツ子氏、那覇市長の翁長雄志氏、沖縄県経済団体会議議長の知念榮治氏が出席致しました。

設立総会会場風景

4月から香港エキスプレス航空による沖縄・香港間の直行便が開設され、5月には沖縄日本香港協会が設立されたことを受け、6月16日から19日の日程で、仲井眞県知事が率いる60名を超える一大ミッションが香港を訪れました。そのうち國場会長が率いる約50名の経済ミッション団が、17日に香港貿易発展局の本部を訪れ、副総裁のクリストファー・ジャクソン氏による熱のこもったブリーフィングに聞き入りました。その後、在香港観光関連企業や日系スーパー等の表敬訪問・視察のスケジュールを終え、19日に無事沖縄へと戻りました。

クリストファー・ジャクソン副総裁と経済ミッション一行

対談 香港、言いたい放題！

久末 亮一（政策研究大学院）
VS
武田 信晃（フリーランスライター）

久末 亮一　武田 信晃

探れば探るほど、私たちをひきつける街、香港。その底流には、何が潜んでいるのか。今回は気鋭のフリーランスライターである武田信晃氏と、香港を中心とした華人経済圏研究の第一人者である久末亮一氏に、香港について縦横無尽に語っていただいた。

武田：本日はありがとうございます。さて先日、香港中文大学アジア太平洋研究所の世論調査によると、5月の四川大地震を契機に、香港人のアイデンティティに変化が起こっているとありました。今年4月にはほぼ38％：52％の割合で、中国人：香港人の認識だったのが、5月は逆に56％：28％の割合とか。また双方と答える人の割合も増えています。やはり主がかわった、旗が変わったことを認識せざるをえません。まあ、聖火リレーで愛国心がくすぶられ、大地震で目覚めたという感じでしょうか。

久末：中国への「帰属感」が高まっているのでしょうかね。それにしても変わり身が早いのは、相変わらずの香港らしさです。ちょっと前までは、本土の人に比べて、自らが香港人であることに優越感を表す人も多かったのですが。

武田：なんというか、やはり香港人は時流に乗るのが天才的です。ビジネスでもそうですが、実にフレキシブルです。

久末：香港では「頭脳霊活」(タウノウリンウッ)といいますが、機動的に対応できる柔軟性を持つことは、賞賛の対象です。これが人にも都市にも貫徹しているところが、香港の活力の一つであることは間違いないですね。

武田：悪く言えば、しばしば節操がない…。

久末：これは香港の「植民地性」に由来するものだと思います。基本的には今も昔も越えがたい「ガラス天井」があり、それならば名より実を取ろうとする功利主義、その次に体制に順応して名誉を占めたいという欲求がある。「昔「CBE」(Commander of British Empire)、今「政協」(人民政治協商会議委員)」。しかしそこには、イギリスの香港支配が残した「罪」の部分も見えます。ガラス天井を作って信じ込ませ、自らの秩序に組み込んで躍らせる。一種のマインドコントロールです。このなかできわめて「現実的」に生きる香港人は、そうした生き方に慣れてしまっている。

武田：そうした意識が根底にあって、実は皆が全力で「踊って」いるのだとしたら、あの香港のスピード感、変化の速さ、街の勢いは、けっこう怖いですね。金持ちは尊敬されるし、物質的には満たされる。植民地で認められるには、それしかない。でも、それが幸せを約束しているわけではないにもかかわらず、目に見えるところに、ものすごい貧困とものすごい贅沢が生々しく横たわっていると、ついつい駆り立てられるのが人間の性（さが）なのでしょうか。

久末：そうです。でも、ぼくも武田さんも、香港に住んでいたときにはそのリズムに「乗る」ことにけっこう慣れていたと思いますが、ぼくはもう日本に帰ってきて4年も経ったから、最近は香港に行くと違和感のほうが強くなってしまいました。

武田：あー、それはリハビリ終了。でも奥さんは香港人なのに（笑）。

久末：奥さんが逆に「日本化」してきました（笑）。

武田：しかしあの香港独特のリズムに「乗れ」ず、戸惑う人はけっこう多いと思います。やはり日本は組織として動く分、手堅い一方で意思決定のスピードが遅い。部長の決裁が常務の決済がと言っている間、香港ではビジネスがポンポンまとまる。

久末：でも日本企業には日本企業のペースがありますし、その組織性・硬さ・慎重さが強みの部分もあるのですから、一方的に香港のペースに乗せられてはいけませんよね。あの香港のスピード感というのは、一方では非常に危険です。社会全体がそうして動いていることでいいかげんな部分も多く、問題が次から次に起こってきますから、それを処理する能力を有していないとパンクします。

武田：そうですね。一方で日本のビジネスマンのなかには、香港で成功している人がいますね。たとえば繊維製品輸出だけでなく、シティスーパーなどにも関与し、さらに世界的ブランド「アンテプリマ」を展開する「フェニックス・グループ」の荻野さんとか、倉庫業大手「エバー・ゲイン」を創業した小寺さんとか。

久末：ぼくの大学時代のゼミ仲間の父親も、大手商社の駐在員として香港に来てから独立して、繊維製品貿易で財を築き、香港在住数十年。いまはヴェトナムで不動産開発を展開している人がいますね。すごいお金持ちです。

武田：ほとんど表には出てこないですけど、腕一本で成功している人たちですね。

久末：彼らは香港のリズムに「乗れる」人たちなのでしょう。一方で、荻野さんのインタビュー記事などを見ていると、香港人とは違った日本的感覚の強みを生かすことで、信用やビジネスチャンスを獲得している。いずれにしても、香港では「個」に属する総体的な実力が大きく影響します。どの家族か、どれだけの資力か、どれほどの才覚か、どの組織に属しているか、などの総体として、「個」が判断される。

武田：属する組織を主体に考えるカルチャーはないですね。競争社会・実力社会です。「日本ですと、あなたはどこの大学出身ですか？ですが、香港は、あなたは何が出来ますか」になります。

久末：それゆえに、自らを守る「リソース」を獲得するには、「つながり」を求める必要があるのです。香港、というか中国系社会の基礎形態はランダム・

（P12下段に続く）

啓徳空港の想い出

広報委員　小柳　淳

香港到着が近づき、ベルト着用サインが点った飛行機は高度を下げている。窓からは海上に点々と碇泊している数多の船が見える。普通の空港への最終アプローチならば、この後は青い海原か緑の地面を眺めながらの着陸となるのだろうが、香港はそうではなかった。昂船洲と葵涌のコンテナターミナルを眼下にした後は、あろうことか機体の下には中低層の建物が密集する市街地が現れるのだった。香港アニメ、子豚のマクダルが住むという深水埗を過ぎると、機体は右に傾いて旋回し、間近に大きく見えるビルが翼のすぐ先を次々と後方へ流れ去ってゆく。香港啓徳空港への着陸は、都市香港そのものへの到着であった。

100年ほど前まではここは大きな九龍湾の海だった。埋立と開発事業を啓徳公司が着手したのが20世紀初頭。この企業は創始者の何啓と區徳の名から命名されている。開発事業は失敗に終わるが、広大な埋立地と啓徳の名は地名として残った。航空輸送黎明期にさしかかっていたころでもあり、その後ここが空港として整備されることになる。当時の写真を見ると、空港施設に藁葺のものがあるなど牧歌的な風景だった。真珠湾攻撃と同日に日本軍が啓徳空港を爆撃したときもまだ海辺の小さな空港でしかなく、長大な滑走路が海に突き出すのは戦後のジェット旅客機時代になってのことだ。そして、香港の人口激増と高度成長にあわせて空港周辺の市街地化が進展し、世にも稀なる市街地空港となっていった。空港敷地のすぐ外にはビッシリと建物が密集し、着陸用誘導灯はビル屋上に設置された。住宅、レストラン、店舗、市場とそこに暮らす人々の真上の空は、低空で降下するジェット機のジュラルミンの銀色に一瞬覆われ、すぐ青空に戻るということを繰り返す異常事態だった。そこを歩いた私は数分毎に天を見上げていたが、周囲では何も意に介さぬかのように、淡々と暮らしが続いていた。

翼の下には密集した建物

着陸、そして逆噴射の音と振動を感じて滑走路上を減速している窓には、キラキラ輝くビクトリア港の水面と高さの揃った中低層ビル群。それは、ドアが開いて生温かい風を頬に受けることに連なる香港到着の印象であった。

低い天井のターミナルビル。いつ着いても大勢の人の姿が騒音と入り交じる到着ロビー。左へずうっと歩いてたどり着く薄暗い団体出口では、頻々と出入りする迎えのマイクロバスとあちこちで集合するツーリスト集団が入り乱れる。まるでそれはハイテンションな香港に立ち向かう準備の場のようであった。尖沙咀や中環などの中心市街地も近く、通天巴士と呼ばれた白いエアバスが空港とを結び、タクシーに乗ってもあっと言う間に着いてしまう、旅客にとっては実に便利な空港だった。出発ロビーでは真っ赤なチェックインカウンターと黄色の出発案内ボードが旅客を捌いていた。数日香港で遊んだ観光客も、数年の駐在を終えたビジネスマンも、そして中国返還を前にした不安から海外移民を決めた人々も、この空港から飛んでいった。

1998年7月5日、正確には6日に入った深夜、香港啓徳空港は70年以上の歴史を閉じた。その日は小雨降る中、空港周辺には大勢の市民がカメラを手に集まっていた。近隣のビルでは屋上や駐車場への立入りが制限され、空港パーキングビルはにわかカメラマンが鈴なりになった。翌日の新空港から出発するため、啓徳から新空港への回送便が次々と離陸。深夜1時過ぎ、最後の回送便が離陸。アンソン・チャン政務司長が啓徳空港管制塔で見守る中、1：17に滑走路灯消灯。

あれから10年。啓徳空港跡地は近未来市街地開発の準備をしているようだ。何啓と區徳の想いが100年を経て実るのだろうか。空港のための周辺地区建築の高さ制限がなくなり、九龍にも超高層ビルが次々建設されてきた。啓徳空港跡地脇にも天に向かって背伸びしているようなビルが出現している。もはや、どんなベテランパイロットでもここには恐ろしくて降下してこられないビルの森になった。

●お知らせ

啓徳空港閉港10周年を記念した本がこの秋、出版されます。
書　名／啓徳懐想　　著　者／関根寛
出版社／TOKIMEKIパブリッシング
★詳しくは下記サイトでどうぞ
http://www5f.biglobe.ne.jp/~hongkong/kaitak.html

飛龍　No.59　2008年8月発行　（禁無断転載）
日本香港協会　広報委員会
香港貿易発展局東京事務所内
〒102-0083　東京都千代田区麹町3-4　トラスティ麹町ビル6階
電話（03）5210-5870　FAX（03）5210-5860

関西日本香港協会
〒541-0052　大阪市中央区安土町2-3-13
大阪国際ビルディング10階　香港貿易発展局内　電話（06）4705-7030

中京日本香港協会
香港貿易発展局大阪事務所気付
〒541-0052　大阪市中央区安土町2-3-13
大阪国際ビルディング10階　香港貿易発展局内　電話（06）4705-7030

福岡支部
〒810-0013　福岡市中央区大宮2-3-7
協同組合福岡情報ビジネス内　電話（092）534-6331

山形日本香港協会
〒990-2432　山形市荒楯町1丁目14番21号
（株）日本不動産コンサルティング内　電話（023）633-2110

北海道日本香港協会
〒060-8661　札幌市中央区大通西3-11　北洋銀行国際部内
電話（011）261-4288　FAX（011）232-6921

宮城日本香港協会
〒980-0811　仙台市青葉区一番町3-7-23　明治安田生命仙台一番町ビル3階
（株）JTB東北　交流文化事業部内
電話（022）212-5552　FAX（022）212-5556

沖縄日本香港協会
〒900-0033　沖縄県那覇市久米2-2-10　那覇商工会議所内
電話（098）868-3758　FAX（098）866-9834

URL　http://www.jhks.gr.jp

北京五輪 香港で開催される馬術競技

『香港ポスト』編集長　　杉村　朋子

北京五輪が間もなく開幕します。日本では「日本史上、最高齢のオリンピック選手」という記録を更新する法華津寛(ほけつ　ひろし)選手(67)の出場が確実となって馬術競技が注目を浴びています。

ところで「北京五輪」の名を冠しながら、馬術競技の会場は香港です。一国二制度をうたい、返還後も中国本土との往来に出入境管制を敷く香港で、北京五輪の一部が開かれることになった背景をご紹介しましょう。

北京市が「第29回オリンピック大会」の開催地に決定したのは2001年7月13日。香港特区政府はこの直後から、サッカー、武術、卓球、ヨットなどの会場として名乗りを上げたといわれます。しかし当初、北京側は全競技を北京市内で開催する方針でした。

ところが03年、SARS(重症急性呼吸器症候群)が広東省から各地に広がり、重篤な被害をもたらしました。この新型肺炎は野生動物が感染源と推定されたことから、中国で動物検疫の問題がクローズアップされたのです。「大量の馬を外国から北京へ輸送するには検疫態勢が不十分である」。一方、香港ジョッキークラブ(HKJC)が世界の名だたる競走馬を集めて国際重賞レース(G1)を開催する香港には、欧米先進国に引けを取らない検疫態勢や医療施設が整っています。

こうした事情から、北京五輪組織委員会は香港側に協力を要請し、検討の末、香港に馬術競技の会場を設けるのが最適と判断しました。そして国際オリンピック委員会(IOC)が「馬術競技の香港開催」を承諾したのは05年7月のことです。

オリンピックの馬術競技には「馬場馬術」「障害飛越」、この2種目に「クロスカントリー」を加えた3競技を同一の選手と競技馬が行う「総合馬術」の3種目があります。HKJCが後方支援するといっても、検疫や医療などの経験と人材を提供するのであって、既存の競馬場そのものを使用するのではありません。五輪開催にあたり、沙田競馬場に隣接した香港体育学院の敷地を借り上げ、馬場馬術と障害飛越の会場として1万8000人収容の全天候型スタンドを備えた馬場を建設しました。クロスカントリーの会場にはHKJC双魚河村会所(ベアズリバー・カントリークラブ) から香港ゴルフクラブの敷地にわたって長さ6500メートル、幅10メートルのコースを造りました。このほか検疫に合格した馬の小屋、不合格となった馬の隔離施設を沙田競馬場内にあるペンフォールド公園内に建てています。

7、8億香港ドルと見積もられた建設費はHKJCが負担しますが、競技開催にかかる費用は北京五輪組織委員会が支出し、入場料収入は同委員会のものとなります。また、一国二制度下の香港は中国と別に選手団を組織するため、馬術競技の会場を提供しても「開催地選手」という参加資格の優遇を香港人選手が受けることはありません。特区政府はむしろ、オリンピックのために香港を訪れる選手団やメディア、観衆が1～3億香港ドルを消費すると試算し、その波及効果に期待を寄せています。

聖火リレーの第一走者は香港初の金メダリスト李麗珊さん（写真提供：香港特別行政区政府）

さて今年4月、梁愛詩(エルシー・リョン)前司法長官が北京五輪組織委員会の任命を受け、北京オリンピック・パラリンピック選手村副村長に就任しました。馬術競技に伴う「香港分村」は沙田の帝都酒店(ロイヤルパークホテル)に置かれます。香港紙『明報』によれば、同ホテルでは3億香港ドルをかけて開業以来の大規模な改装工事を行い、セキュリティーを強化。五輪開催中の約1カ月間、300人以上の選手団を受け入れます。審判や報道関係者は沙田麗豪酒店(沙田リーガルホテル)に宿泊することになっています。

そして海外観光客の誘致には香港きっての映画スター、成龍(ジャッキー・チェン)が一役買いました。

香港政府観光局(HKTB)のプロモーションビデオで馬に乗り「オリンピックは香港観光に千載一遇のチャンス」と呼び掛けています。

馬術競技の香港開催を世界に宣伝するジャッキー・チェン（写真提供：香港政府観光局）

3月から世界各地で放送したそうですが、皆さんも乗馬姿のジャッキーをご覧になったでしょうか。

夙川 優のドラゴンボートレース参戦記

6月8日は、梅雨本番、夏の入り口。しかし、幸運にも何とか天候は持ちこたえた日曜日、行ってきましたドラゴンボートレース@山下公園。日本香港協会は「飛龍」、「飲茶」、「九龍」の三艇でサンデーチャレンジ・香港カップに参戦です。昨年に引き続き、私、夙川優が漕ぎ手としてレポートさせていただきます。

当初申し合わせた集合時刻は11:00am。埼玉県在住の私はなんと、時間を読み間違えて11:30の到着。大幅に遅刻をしてしまいました。さて、皆に迷惑をかけながらあわてての準備。日本香港協会は「飛龍」、「飲茶」、「九龍」の三艇で出走です。私は、香港日本人学校OBの面々と共に、当初は「九龍」に乗る予定でしたが、人数などの関係でクルーが丸ごと急遽「飲茶」へ変更。そして、なんと、毎年キャプテンとして活躍をしてくれている「クリキン」こと栗山氏が足を骨折して松葉杖で登場。とても一緒に漕げる雰囲気ではありません。「飲茶」、ピンチ！

しかし栗山氏は、漕げなくとも気持ちは一緒、と力強くメッセージ。また、好タイムを導くべく、私たち「飲茶」号のコーチを務めてくれました。やがて恒例の「栗山氏のスペシャルブリーフィング」が始まります。毎年烏合の衆（失礼！）の私たちに、「素人が勝てる戦略」を短時間に、そして、的確に伝授をしてくれます。これが驚くほど奏効するのです。

さて、少し大会のおさらいをします。このドラゴンボートレース、基本的には全艇タイムアタック。2回出走をしたあと、上位3チームが決勝戦で競う、というのがルールです。しかし、一回のタイムアタック毎に3艇で出艇して競うので、見た目は横に並んだ相手とのデッドヒートが繰り広げられるわけです。そして、ドラゴンボートレースでは、ライバルのタイムが拮抗しているとさらによいタイムが出る、という傾向もあるようですので、実力以上を発揮するには、どのチームと出走するか、その組み合わせはとても重要なのです。

いよいよ私たちの出番。救命具を身につけ、舟に乗り込んで、オールを受け取る。合図と共にスタート地点へ。ここで、海と競争相手と審判員を相手にした絶妙な駆け引きを繰り広げ、サイレンと共に「そーれ！そーれ！」と漕ぎ始める。個人の力ではなく、チームの力が試されるこの競争。チームが一体となる高揚感！「飲茶」は短時間にチームビルディングをする天才です。第一走では二位を舟一隻分だけ引き離して一着でゴール。何とか勝つことができました。

ヨーイドン！

陸に上がり、昼食休憩をしながら、次の出走のための反省会。そして作戦を練る。ここでも栗山氏が大活躍です。彼の手法では、重要なのは必ず成果をフィードバックして、次の改善に生かすこと。その改善のポイントは必要にして最小限なポイントに絞り、実現するためにチーム総力で取り組むことだそうです。クルーは皆、栗山コーチの指導を真剣に聞き、チーム力の再構築に専念しました。

そして第二走。しっかりとスタート時点での駆け引きをし、「プワーッ」。サイレンと共に、全力で、オールを、合わせて、漕ぐ、漕ぐ、漕ぐ！

激走する「飲茶艇」

漕ぎ手は、約一分半、弛まず、合わせて、一所懸命漕ぎます。ゴールが見えてくるとめげそうになる。しかしあきらめない。自分の限界と勝負する、そのような気概で漕ぎ続けるのです。

結果、第二走はダントツの一位。「飲茶」は本当にがんばりました。前走タイムを5秒も縮めたので、すばらしい成果です。一緒にスタートした他の二艇は進路妨害など不運に見舞われた様子でしたので、出走のライバル艇と一緒にもがんばれたら、もっとタイムが出たかもしれない、と「飲茶」クルーが異口同音に悔しそうな様子でした。最終結果は、二十四艇中、八位の記録となりました。

昨年よりは順位を下げましたが、無事出走し、個々の競争では一位。これ自体はかなりよい結果、といえるでしょう。しかし、昨年は表彰台だったので、関係者はちょっと残念だったかもしれません。次回、表彰台を実現するためには、今から何をすればよいか。今回のクルーは早速考えることになりそうです。レース参加の皆様、協会関係者の皆様、本当にお疲れ様でした。また来年、参戦できることを楽しみにしています。

＊大会当日は東京メトロ・副都心線の開通直前でした。2010年には川越～元町・中華街が一本で結ばれるそうですので、埼玉県在住の方は、アクセスがとてもしやすくなりそうです。

KANSAI

支部便り

CMMS第5期修了式

関西日本香港協会　理事　　斎藤　治

関西日本香港協会が主催する「チャイニーズ・マネジメント＆マーケティング・スクール（CMMS）」の第5期の終了式が、6月13日に香港貿易発展局大阪事務所で行われた。

昨年9月13日から今年6月6日まで、10か月間、計30回の講義（さらに湯浅邦弘・大阪大教授の「三十六計」の補講も1回あった）を無事終えて、やっと区切りをつけることができた。

数回だけの受講生を含めると、受講生は延べ43人。30講座の7割以上、21講義に出席して修了証を手にしたのは17人だった。そのうち3人が30講座すべてに出席し皆勤賞を得た。また、既にCMMSを受講したが、規定の出席回数に達せず、再チャレンジして、見事修了証を手にしたのも3人。金曜日の夜は社会人の会合も多いが、そこを何とか調整して講義に出席した受講生の熱意には、本当に頭が下がる。単身赴任で、週末には東京の自宅に帰るのを1日延ばしたり、海外出張帰りに講義に直行したり、CMMSに取り組んだ受講生の苦労がしのばれる。

このような背景があるため、修了式は非常に盛り上がった。木全千裕・関西日本香港協会副会長が「5期CMMSの成功は、実力ある講師陣と欠かさず出席されたみなさんの熱心さのたまものです。中国は今、これまでの高度経済成長のひずみが出ている。これに対して日本企業も対応が求められている。CMMSでみっちりと勉強した成果を実践に生かす時がきた」と挨拶し、受講生一人ひとりに修了証と記念品を手渡した。

CMMS第五期修了式で挨拶する木全副会長

この後、受講生のスピーチに移った。

「中国の文化、歴史、中国人の心理などを理論編で学び、実践編では現場でそれがどう生かされているのかを学べた。一番の財産は受講生のネットワーク」「32年間商売してきて、大学卒業以来、まとめて勉強できた。シャワーのごとく情報をもらった。もらった資料は9.96kgにもなる。2次会では中年の居酒屋を十分楽しんだ」「金曜の夜ということで、正直足が重かった。でも、すぐに講義にのめりこんで、会社を病気で休んだ日でも夜のスクールには参加したほど面白い講義だった。異業種のトップの方からも刺激を受けた」「勉強の甲斐があったのか、中国で会社を作ることになった。何よりも異業種の人との交流や2次会で講師の先生から話を聞くことができた」「華僑のネットワークに興味持っていた。かれらのたくましさを学びたいと思い受講した。こんな楽しく、自分が内面からクリエイトされるとは思っていなかった。CMMSをもっと多くの人に知ってもらいたい」「通算9年間、中国大陸に勤務したが、華南経済圏についての新たな切り口を知ることができた。中年になってから知的興奮を与えていただいた」「知ること、学ぶことの大切さを感じ、実践しなくてはならないと思った。香港を最大限に活用して中国ビジネスをしていきたい」「修了証をもらうまで足かけ3年かかった。でも、懇親会には通算60回は出席している。中国各地を見て歩き、講義での話がなるほどと思うことが多い。ますます中国人が面白くなった。それと同時に日本人も見えてきた」等々。

各人の思いのこもったスピーチを聞いて、受講生に満足してもらったことを改めて感じた次第だ。異業種の人たちとの交流や講義から、全く新しい知見を得て、大いに刺激を受けたことがわかる。何よりも2次会、香港研修旅行などを通じて構築していった人間関係が大きな財産となったようだ。

来賓として出席した青木俊一郎・日中経済貿易センター理事長は「松下電器に勤務し、長い間、中国、台湾、インドネシアに駐在したが、こういう教育は受けていない。みなさんがうらやましい。現場で覚えるOJTに加え自ら学ぼうという自己啓発が、一番身につく」と述べた。

CMMSを企画し、その推進役を果たしてきた古田茂美・香港貿易発展局日本首席代表も東京から駆けつけた。古田代表は「CMMSは地理的、時空的なひろがりの中でやってきた。中国で起きる事象を理解する道具、パラダイムをここでの講義から学べる。修了してもみなさんのご協力をお願いしたい」と呼びかけた。

記念撮影をした後、場所を近くの居酒屋に移し、2次会となった。二胡を習っている受講生の武津心平さんが、日頃の精進ぶりを披露するミニ演奏会もありという楽しい会になった。

第6期のCMMSは9月18日からスタートする。10月の香港フォーラム参加に合わせて、受講生の研修旅行も行う予定だ。「浪花の中国経営塾」として定着したCMMSをさらに盛り上げていきたい。

関西支部

第1回経済セミナー開催
Ny・lon・kong 世界の注目を浴びる香港とその活用法

関西日本香港協会　理事・事務局長　　戒田　真幸

関西日本香港協会では、中国ビジネスの人材育成を目的に5年前より「チャイニーズ・マネジメント・アンド・マーケティング・スクール」を主催してきましたが、本年度より関西の中小企業に対する中国ビジネスと香港に関する情報サービスを強化する目的で定期的に経済セミナーを開催することとし、去る7月3日に大阪国際ビルディングの会議室で「Ny・lon・kong 世界の注目を浴びる香港とその活用法」と題した第一回経済セミナーを香港貿易発展局と共催しました。

今回のセミナー講師は、香港貿易発展局大阪事務所長のフェリックス・チャン氏にお願いしました。チャン氏は1999年に香港大学商学部を卒業後、香港貿易発展局に入局され、本部と米国のロスアンゼルス事務所にてマーケティング・プロモーション活動に従事、2005年に東京事務所長に就任、2007年より大阪事務所長に就任、堪能な日本語でエネルギッシュに活躍しておられます。76名の参加者に対し、豊富な情報資料を提供し具体的な成功事例等も紹介されて大阪の企業と香港企業との間で「Win-Win関係」を築きたいと熱っぽく語られました。

第一回経済セミナーで講演するフェリックス・チャン香港貿易発展局大阪事務所長

チャン氏は、先ず今年1月17日付米国タイム誌のマイケル・エリオット氏の記事「3都市物語―世界経済を牽引する3都市連携（ニューロンコン）」を紹介し、発展を続ける香港に対する関心が世界的に高まっていると述べられました・同記事によると、3都市は港湾都市で、今や香港の海運業が最も栄えており、3都市の主要産業の発展に寄与している。グローバリゼーションの発展に伴い共通の経済文化を持つニューヨーク・ロンドン・香港の3都市が世界経済を牽引する潤滑油の役割を果たしており、中国への進出を容易にする金融ネットワークを構築していると解説しています。チャン氏は3都市の共通点として①製造業よりサービス産業中心にシフトして成功している②ロンドンはヨーロッパ地域、中近東、ロシアの、ニューヨークは北米、南米、中米の、香港は中国本土と日本を含むアジアの国際的なハブになっている③人、物、資金、情報のフロー経済で発展している現状を指摘されました。

香港経済は、2004年―8．6％、2005年―7．5％、2006年―6．8％、2007年―6．3％と目覚しい成長率を実現しており、米国ヘリテージ財団発表の世界経済自由度ランキングで14年連続して世界第一位、又、日本経済研究センターが発表する世界50か国の潜在的競争力ランキングで3年連続世界1位でした。国際的なハブとして発展する香港には3900社の外資系企業が進出しておりその内米国に次いで多い日本企業は750社で香港返還後は外資系企業に加えて中国系企業の香港進出が増え続けています。中国本土との結びつきがが深まった結果香港の一人当たりGDPが日本と同水準の3万米ドルに達しております。このような発展する香港に対し中国政府は、胡錦涛国家主席の後継者候補と言われる習近平国家副主席を昨年11月に香港統括責任者に任命し香港重視の姿勢を打ち出しております。

日本の主要エコノミストが編集しベストセラーになっている「進化する香港」の中で、香港の競争力の源泉として①社会関係資本②人的資源③金融資本④制度インフラ⑤物流システムの5つの資本が優れていると指摘されています。チャン氏はこれらの5つの香港優位資本を活用して事業に成功した具体例事例、サンリオと利豊集団の業務提携でWalker Groupの店舗を活用した日本ブランド宝飾品の中国・台湾・香港・マカオでの販売成功、Balenoが直営とフランチャイズ方式で中国内350都市に350の店舗を展開し14の独自ブランドと13の代理ブランド洋服を年間6千万着販売している成功事例を詳しく解説されました。

又、香港の優れた経営者が国際的にも活躍している事例として、アジア人として始めてパリのICC会長になったVICTOR　FUNG氏、元香港財務長官でHSBCのトップマネジメントを務めているVINCENT CHENG氏、WTOの事務総長のMARGARET CHAN氏、等紹介し、トイザラスが優秀な香港人を活用して中国での事業に成功していると説明しました。日本企業の成功事例として、九州本社の味千ラーメンが1996年に香港に第一号店を出し、現在中国本土の138店を含めて220店舗を有し昨年香港で株式上場したケースも紹介しました。中国本土から優秀な大学生も沢山香港に留学しており、豊富な人材、香港企業30万社の内、12万社が中国に進出している人的ネットワーク、税制上有利で中国進出を容易にするCEPA（経済貿易緊密化協定）、香港の物流システムや優れた情報、金融インフラを活用して新規事業に成功して欲しいと強調され、大阪と香港との間でWIN＝WINの関係を構築したいと訴えて講演を終了しました。今回の講演で香港に関する理解と関心が大いに深まったものと思います。

CHUKYO 支部便り

中京支部

中京日本香港協会主催
香港ビジネスセミナー(夏季)開催報告について

中京日本香港協会　副会長
事務局長　　佐藤　亮一

当期の中京日本香港協会の会員のサービスは、先ずもって夏季ビジネスセミナーの開催にある。向暑に一服の清涼剤は、何と言っても講演される先生方の選出にあり、本年7月2日(水)13:30～17:00まで長時間に亘り実施された。

●講演Ⅰ
(社)日本鉄鋼連盟　常務理事　又　中京大学大学院教授であり、元、中部経済産業局長の細川昌彦講師です。

●講演Ⅱ
(株)貿易人　代表取締役 馬場正修講師です。元三井物産(株)、ジェトロ大阪アドバイザーも務められた。

御両名による話題・内容には最後まで席も立たず、興味のある話しぶりに会員の満足度を感じた。

特に講演Ⅰでは、「鳥の眼から見た グレーターナゴヤ」～グレーターナゴヤを提唱　名付人でもある～は、3大演目である「虫の目」(足元から観た世界)、「鳥の目」(遠く上空から観た世界)、「魚の目」(時流を読む世界)の中、本日は鳥の目の講演を聴く機会を得た訳である。

講演Ⅰ：「グレーターナゴヤ」で熱弁する細川 昌彦氏

講師は、名古屋経済に対しての見識は勿論、名古屋に留学している学生に対しても、学校の「枠」にとらわれず、一緒に活動する「場」を与えられるのは、名古屋が最適であるとの提案もされており、例えば、八事地区を取りまく四大学の留学生が一緒になり、大きな目で文化、知識、将来の経済の動きを活性化させてはどうか？という発想は、可能性として非常に有意義と思われた。

又、8月に東洋経済から発刊予定の「メガ・リージョンの攻防」(細川昌彦著)でも唱われる「人材・企業の争奪戦にどう勝利するか」、特に東アジアベルト地域における競争力にどう対処してゆくか、果たして、日本目線は国内だけに向いていないか、それでは東アジアで起こっている熱烈な地域間競争時代に取り残されるのではないか？　世界という上空からみた時、日本、中でも中心であるナゴヤ経済(グレーターナゴヤ)としての存在への期待等々、講演時間が足りないという印象を出席者は全員感じたと思われた。

講演Ⅱでは、「香港・華南地域におけるこれからの事業展開」とのテーマで、馬場講師による実体験での課題性にも、中国・香港・シンガポール等々と貿易を始めたい会員にとり、興味のある提供・提案がされた。

講演Ⅱ：「孫氏の兵法36計」を語る馬場 正修氏

例えば、中国・香港ビジネスにおける企業とのパートナーシップの留意点では、①文化摩擦～日本は単一民族、単一言語、単一文化、阿吽の呼吸で理解する「信頼社会」、一方、中国では56民族が共存する多民族、多言語、多文化でいう複合民族国家「低信頼社会」、中国人の行動原理に於ける人間関係は、血縁、地縁、文縁、善縁を基本とする私的な関係の集合ネットワークの理解をしないと、人・物・金情報が動く、特殊な「関係社会」は作動しない～等々、話題の豊富な講師の経験に、メモを採る会員が多く見受けられた。

今回の出席も68名と、個人・企業共、会員の積極的な参加で、今後共、年に1回(春・秋期)、会員の「糧」になる話題の提供をしてゆきたい。

最後に、いつもながら貿易発展局のご協力には感謝申し上げる次第です。

FUKUOKA 支部便り

福岡支部

日本香港協会福岡支部　副会長　　藤村　勲

目指すは「アジアの交流拠点都市・福岡」

今年の4月に中国・上海を発着港に周遊する豪華客船が博多港に入港し、いま福岡の都心部では中国の観光客が特に増加しています。

世界最大規模のクルーズ会社が、福岡や韓国・釜山などを巡るコースを5月まで計6回運航、来年以降も同時期に実施する計画であるといわれています。乗客の多くは中国の富裕層であり、滞在時間もわずか半日ではありますが、「アジアの交流拠点都市」を目指している福岡にとっては大いに活気づいております。

このように特に福岡はアジアの玄関口とも言われ、観光のみならず多くの外資系企業も起業し、今後の経済・貿易・交流の発展において著しいものが期待されるのではないかと考えます。

また、近年、福岡市と友好都市の締結をしている広州市には日系自動車メーカーが次々と進出し、「中国のデトロイト」と称されています。年に一度、広州市でモーターショーが開催されておりますが、その背後に広がるのは広州を中心とした活気あふれる華南市場であるといえます。

華南市場の消費能力は主に広東省に集中しており、中でも深圳、広州、などが広東省内の主要消費地であります。全国の他の地区と比べ中・高級乗用車の競争が最も激しい地区とされ、その販売台数がエコノミーカーを大きく上回っているのが現状だそうです。つまり、中高級車志向が華南自動車市場の大きな特徴となっていると言えるでしょう。

このように、自動車メーカーにおいては華南市場の役割が今後の市場の先行きを示すバロメーターとなり、国内外からも高い関心が寄せられています。来年は、福岡市と広州市が友好都市として締結して30周年を迎え、物流面でのさらなる交流も期待されるところであります。

福岡支部理事会・通常総会開催

去る5月16日(金)に平成20年度第1回理事会及び通常総会がグランド・ハイアット・福岡のサボイルームにて開催されました。

理事会・総会には私共のためにわざわざ東京より香港貿易発展局から古田茂美日本首席代表並びに伊東正裕東京事務所次長、また同局大阪事務所よりフェリックス・チャン所長、田中洋三氏がご参加くださいました。平成19年度の事業収支報告などの議案事項に沿って審議・決議され理事会及び総会は無事に終了することができました。

第16回通常総会

理事会の中で会員増強の方法としてまずは年会費の見直しをしてみてはどうかとのご意見があり、伊東次長から他支部の現況をお聞きいたしました。福岡はアジアの玄関口であり、当支部の活動も主に企業と企業の繋がりをメインにセミナーを開催してまいりました。

しかし今後はもっと入り口を広げ個人の会員増加にも重点をおき、香港がより身近に感じられる企画を考えていきたいと思います。

さらにこのたび福岡支部では、新たに副会長として株式会社西日本シティ銀行 佐々木克 取締役副頭取が就任されることとなりました。佐々木副会長は、旧株式会社 西日本銀行時代に香港駐在員事務所長を歴任されたご経験があり、香港との関わりも大変深い方です。また、古田代表とは旧知の仲でいらっしゃるとのことで当支部としましても強力な方に副会長に就任していただいたことは大変有りがたく、今後の活動がさらに活性化するのではないかと思います。

「香港から観る中国の変貌2008年」講演会開催

同じく5月16日(金)に第1回理事会・第16回通常総会終了後、同ホテルのザ・グランドボール・ルームにて香港貿易発展局 古田茂美日本首席代表による「香港から観る中国の変貌2008年」(日本香港協会福岡支部主催・社団法人 福岡貿易会・福岡商工会議所後援)講演会が開催され約70名にも達する方々にご来場いただきました。

講演会では香港から観る中国の最新動向から、香港学界が外資企業に教える中華ビジネスの構造・手法についてもご紹介いただき、古田代表の斬新性のあるお話しにはご来場いただいた方々からは「素晴らしい！」「もっと話を聞きたい！」との声がたくさんあがり、大変深い関心を与えた講演会でありました。

今後は講演会も含めたビジネス懇親会といった交流の場も提供できるようにしてまいりたいと思います。

講演会で真剣に耳を傾ける参加者の方々

YAMAGATA 山形支部

支部便り

地方観光地再生への取り組み
――中国国立大学インターンシップ制度活用プロジェクト――

山形日本香港協会　副会長　　大山　康吉

バブル経済崩壊以降、リゾートホテル・旅館の需要は低迷状態が続いており、海外から観光客を積極的に受け入れることが重要な課題となっております。国土交通省は「ビジット・ジャパン・キャンペン」を展開し2010年までに外人観光客1000万人を目標に東南アジア・中国をはじめ各国にPR活動を行っています。

しかしながら、受け入れ側の特に地方のリゾートホテル・旅館では外国語やマナー慣習の違いが原因によって受け入れを躊躇しており、ますます先細り感が拭えません。

具体例ですが、ここ山形の蔵王においての観光客数・スキー客を例に取ると平成元年度が155万人でしたが平成10年度は105万人、平成19年度では59万人まで激減の一途を辿っております。全国的な組織レベルでの指標ですが、日観連加盟平成元年度で8500軒が平成19年度で3800軒にまで落ち込んでいるのです。

ところが、救世主のごとく回復の兆しが近年、台湾・中国・韓国からのスキーヤーが増え続けており、年間3万人近く山形県内に来ているそうです。この傾向は益々強まると想定され、政府は中国からの個人・家族連れの査証解禁を検討中にあり2010年には200万人の日本訪問が予定されているとのことです。特に中国の富裕層（年間所得3000万円の6000万人）の購買力は非常に魅力的な客層と言えます。

日本の疲弊した地方経済の建て直しの一端として取り組む必要性を感じさせられます。

現在、東京在住でホテル旅館コンサルタント（当支部賛助会員）の平林正次氏がこの問題解決の為に長年努力してこられ、この度、中国の国立大学と提携して日本語学科の学生のインターンシップを活用して「働きながら実践的な日本語を習得する」ことを目的として日本のホテル・旅館に紹介するマッチング事業を開始し積極的な活動を行っております。

ホテル旅館側と中国の大学との双方の要望を受けて、この取り組みは徐々に広まりつつあります。

働きながら日本語の習得と日本の文化・生活様式に触れ、日本を理解する若者が増えることが本当の意味での両国の交流になると思います。

また、ホテル旅館側の若年層の人材確保とコストの高い派遣会社からの人材確保からの脱却にもかなり貢献できるシステムになっています。

因みに、インターンシップ生の提携先大学は国立蘇州大学外国語学院日本語科2200名・国立江南大学外国語学院日本語学部1500名が対象です。派遣学生に対する特別訓練と研修管理体制の徹底もなされています。

ご興味や詳細についてのお問い合わせ先は、当山形支部大山又は国際インターンシップサポートセンター（03-5688-8691）平林氏までご連絡いただければと思います。

（P4から続く）

ネットワーク（ばらばらの個が多角的につながるネットワーク）なので、血縁でもなんでも、とにかく何らかの「つながり」を得ないと、社会生活上のさまざまな側面で不利益が発生する。

武田：人づきあいの才能が要求されるのは、それゆえですね。食事の席などは新しい人と知り合う絶好の機会です。あと、どこまで生身のつきあいが出来るかは重要ですね。

久末：仰るとおりです。香港の人は時と場によって仮面をうまく使い分けるので、その仮面の中にいる生身の「人間」にタッチできないと、本当に続くつきあいができません。その意味で、広東語の効用は大きなものです。英語や普通話だと、多くの香港人にとっては、やはり「外向け」の言葉です。これが広東語でコミュニケーションできるとわかると、突然向こうの顔つきや態度がフランクになる。

武田：香港の「ツボ」ですね。言葉は社会、文化、地域性を反映しますが、その点で広東語は実に面白いです。日本語のように丁寧語・謙譲語のような、オブラートに包んだ言い方はしないです。あのスラングの多さは、非常に面白いですね。

久末：黒人のことを「黒鬼」（ハッグワイ）とか、白人のことを「鬼佬」（グワイロウ）とか、けっこう普通に言っている。だから「日本仔」（ヤップンジャイ）なんていわれても気にしないことです。ぼくなんか奥さんの叔母さんたちから付けられたあだ名がこれ。本当に口が悪いのですが、一方で別段悪気はないのです。

武田：ははは、そんなカルチャーも香港の一部ですよね。あの独特な、世界に二つとない場所は、よくも悪くも私達をひきつけますし、これからもそういう場所であってほしいと思います。本日はありがとうございました。

久末：こちらこそありがとうございました。

Profile

久末 亮一（ひさすえ・りょういち）／2004年に東京大学大学院博士課程修了（学術博士）。香港大学客員研究員、東京大学助手を経て、政策研究大学院大学研究助手。華僑・華人の経済・経営活動に関する複数の論文がある。著書に『評伝 王増祥　台湾・日本・香港を生きた、ある華人実業家の近現代史』（勉誠出版）。

武田 信晃（たけだ・のぶあき）／香港の日系邦字紙の記者・編集者を経て、2005年よりフリーランスのライター。香港経済からスポーツまでカバーする。共著に『ファーストフードマニアVol1 中国・台湾・香港編』（社会評論社）。香港で女性向けバッグ、アクセサリーを扱うファッションブランドLiucia（www.liucia.com）の経営にも携わる。

HOKKAIDO 支部便り

北海道支部

札幌にお祭りシーズンが到来!!

初夏の札幌を彩るYOSAKOIソーラン祭りのご紹介

北海道日本香港協会　事務局

今回は北海道からお祭りの便りをお知らせします。今年の札幌の春は例年より暖かく、ゴールデンウィークには梅も桜も見頃になりました（北海道では、梅と桜が同時に咲きます）。5月には、気温も20度を超える日が多く、さわやかな初夏を迎え、6月上旬にかけて小学校の運動会が行われます。

例年この絶好のシーズンに、全国から踊り手が結集し、札幌で行われるお祭り「YOSAKOIソーラン祭り」が開催されます。

今年は第17回目で6月4日から8日の5日間開催されました。今や「さっぽろ雪まつり」と並ぶ北海道の一大イベントに成長しました。特に、今年は1ヵ月後に「北海道洞爺湖サミット」を控え、北海道に注目が集まる中、「環境、エコ」と「お祭りらしく、家族と気軽に楽しめるお祭り」をテーマに330チーム、約3万3000人が5日間にわたり各会場で演舞を繰り広げました。

会場は、市内中心部の大通パレード会場やすすきの会場のほか市内中心部の道路を閉鎖したり、市内近郊のスーパーやテーマパークの駐車場などを利用して28の会場で踊り手たちが、鳴子を手に色鮮やかな衣装を纏いソーラン節を織り交ぜた曲に合わせ華麗な踊りを披露しました。観客動員数も200万人を超え、経済効果は245億円にのぼりました。

北海道以外のチームは91チームが参加し、そのうち外国のチームは、アメリカ、ニュージーランド、台湾、ブラジル、ケニアから5チームが参加しました。

今年は、現在4連覇中のチーム「新琴似天舞龍神」の5連覇なるか、あるいは、上位進出の常連、「平岸天神」など他のチームが阻止するかが注目されました。ファイナルコンテストには11チームが進出、迫力の演舞を披露の後、いよいよ順位発表です。前評判どおり、「新琴似天舞龍神」や「平岸天神」などの強豪チームが残り、今年のYOSAKOIソーラン大賞に輝いたのは、「平岸天神」チームでした。「平岸天神」チームは、5年ぶり6回目の大賞受賞となり、「新琴似天舞龍神」の5連覇を阻み、大賞受賞記録も更新、悲願の大賞奪還を果たしました。

ちなみに、14，5年前、まだ、このお祭りが始まったばかりの頃、筆者の職場が札幌市平岸にあり、同僚の女の子が「平岸天神」チームに所属、熱心に練習をしていていました。当時、お祭りの参加チームもまだ2～30チーム、会場も地域の広場や道路など5，6ヶ所程度でした。

それが今や、これほど大規模になり、北海道を代表するお祭りに成長し、身近だった「平岸天神」チームが強豪チームとして活躍していることを思うと感慨深く、歴史と時の流れを感じます。

7月には、「北海道洞爺湖サミット」が開催されました。

北海道は、周囲を太平洋、日本海、オホーツク海に囲まれ、国土の約22%を占めています。豊富な海産物、豊かな土壌で育まれた農産物や乳製品など新鮮な食材がたくさんあります。

明瞭な四季、雄大な自然環境、新鮮な食材、豊富な温泉など魅力ある観光資源もたくさんあります。

「さっぽろ雪まつり」や「YOSAKOIソーラン祭り」など様々なイベントがあり、また、2005年7月には世界自然遺産に「知床」が登録、ユニークな行動展示で全国一の集客数を誇る「旭山動物園」などがあり、国内はもとより海外からも多くの観光客が訪れています。香港からは直行便もあり、4時間でアクセス可能です。

是非、皆様のお越しをお待ちしています。

「YOSAKOIソーラン祭り」大賞の「平岸天神」チーム（平岸会場）

MIYAGI 宮城支部

支部便り

2008年度総会・記念セミナー そして祝賀会を開催

去る5月16日(金)ホテル仙台プラザにおいて、2008年度通常総会を開催致しました。来賓として香港貿易発展局の東京事務所長（日本香港協会理事）ベンジャミン・ヤウ氏御臨席のもと、87名（委任状出席を含む）の出席を得て盛大に行われました。

四議案について満場一致で可決され、最後に代表理事に選任された小野寺初正氏より力強い就任の挨拶がありました。

香港貿易発展局　東京事務所長(日本香港協会理事)ベンジャミン・ヤウ氏の祝辞

続く記念セミナーにおきましては、河北新報社論説委員の佐々木恵寿氏による「世界の食糧需給とアジア、日本」と題した講演があり、東南アジア等の食生活の変化（肉食化）やバイオ燃料（エタノール）の生産による非食用穀物（とうもろこしやさとうきび）の需要の増大などから、「今や世界は食糧危機に直面しようとしている」と警告されました。

そして、祝賀会では、村井知事と梅原市長に揃ってご参加いただき、短くも慈愛のこもったお祝いの言葉に、参加した会員も大変勇気づけられました。

村井知事(右)、梅原市長らとともに

広東語教室を始めました

本年6月10日から広東語教室を始めました。月2回の10ヶ月、合計20回で終了です。講師は香港出身で日本留学中の福島大学の大学院生・蔡 小煦さんです。

受講生は、職種は様々で13人、しかし、香港好きの人ばかりです。今回は初回と言うこともあり、声調、そして母音や子音の発音の仕方、数字の数え方、読み方などを勉強しました。

次回からは、いよいよ会話ですよ。自己紹介や初めて会ったときの挨拶などを勉強します。少しでも香港の人と広東語で話ができるよう、みんなで真剣に勉強しております。

YOU・YOUクラブ発足、春の花見イベント・新緑のゴルフコンペを開催

本年2月26日(火)、「文化、スポーツ交流等を通し気軽に仲間の輪をつくろう」、「香港の青年の皆さんと交流の機会を持ちましょう」等を目的にYOU・YOUクラブが発足しました。「あなた」と「あなた」、または、「友」と「遊」の意味で、人々との交流を通し、学びながら共に成長していこうとの思いから命名されたものです。

4月19日(土)には、早速、お花見会を開催しました。桜前線も北上した抜群の花見日よりと思いましたが、季節はずれの低気圧の通過に伴って、不運にも大雨の中での開催、「花」より「お酒」となってしまいました。

30名を超える参加者があり、和気藹々と語り合い、あっという間の3時間でした。

お花見会での記念撮影

また、6月3日(火)にはゴルフコンペを開催、平日にも拘わらず27名と多くの方にご参加いただきました。天候は曇り、前回の花見に引き続きまた雨かと心配されましたが、なんとか天候も崩れずに、新緑の中で気持ちのいい一日を過ごすことができました。

香港街角歩き

香港日本人学校　　森山　正明

香港の街角を歩いていると、実にさまざまな道路の名前があることに気づく。香港総督の名前が付けられている「軒尼詩道（ヘネシーロード）」、植物の名前から付けられた「荷李活道（ハリウッドロード）」、国と国の境界線を記す「界限街（バウンダリーストリート）」など。ここでは、3つの道路名に焦点を当てるので、その街角散策を楽しんでもらいたい。

★彌敦道（ネイザンロード）

尖沙咀のペニンシュラホテルとシェラトンホテルを起点として、佐敦、油麻地、旺角、そして太子の界限街まで約3600メートル、九龍半島の背骨のように南北を貫いている。

第13代香港総督の彌敦爵士（サー・マシュー・ネイザン）は、九龍半島の発展に奔走。九廣鉄道の工事促進と、ネイザンロードの拡幅工事と並木の整備を行った。ネイザンロードの拡幅は、六車線にするというもの。その当時、発展してきているとはいっても、まだまだ人々の往来は少なく、工事が完了してから「Nathan's Foo（おろかなネイザン卿）」と地元の人から陰口をたたかれていた。しかし、現在の発展を見れば、先見の明があったことになるだろう。

商業と観光の街・香港を象徴するネイザンロード。尖沙咀から太子までの両側には、レストランや小売の店舗が立ち並び、常に人でごった返している。夜になれば、道路上空を塞ぐように突き出た看板からきらびやかなネオンサインが灯りだし、賑わいは最高潮になる。ウインドーショッピングを楽しみながらの散策を楽しんでみてほしい。

★銅鑼湾・高士威道（コーズウエイロード）

高士威道は、香港島の銅鑼湾に位置し、西側は怡和街、東側は英皇道と連結している。

この道路の歴史は、1883年、時の香港政庁が、銅鑼湾地区の埋め立て事業を行ったところから始まった。埋め立てをしたところとビクトリア湾のところに、防波堤を作る必要性があり、防波堤の上に一本の石堤の道を作ることになった。それが今日の高士威道となる。「高士威」は英語で「CAUSEWAY」の広東語発音をそのまま音をあてたもの。「CAUSEWAY」は、「土手道」や「舗装道路」の意味があり、新しくできたこの道にぴったりの名前となった。

防波堤の上に作られた高士威道

この道沿いは、香港で最も有名なビクトリア公園がある。1957年10月に開園。17ヘクタール以上の園内には、さまざまな娯楽施設がととのっている。日曜日には、政治家の討論会やフリーマーケット、ミニコンサートなどが開催されたりする。旧正月前の数日間は、旧暦の新年を迎えるために縁起物の花や鉢植えが売られ活気ある人々でごったがえす市がたち、フラワーフェスティバル、中秋節、工業展覧会などの年中行事の際にも多くの市民が集まってくる。まさに、子どもからお年寄りまで、誰でも気軽に楽しめる公園であり、香港市民になくてはならない存在。ゆったりと散策してもらいたい。

★通菜街（トンチョイストリート）

今回紹介する通菜街は、香港で最も有名な道路の一つである。油麻地から太子まで彌敦道の東を平行して走り、北は界限街、南は登打士街までを貫く、全長一千二百六十メートル。別名「女人街」と名付けられている。

地元客、観光客で連日賑わう女人街

この道の由来は、開港以降、香港で暮らす人々の食料供給基地として通菜（トンチョイ）が多く栽培されたところからきている。また女人街と名が付けられているのは、香港政庁が「小販（露天商）認可区」として、この通菜街を認可区に指定した。当初から婦人服や婦人雑貨を数多く扱い、市民に「女人街」と呼ばれるようにいつしかなり定着したもの。現在も女性向けの商品が数多く並べられているが、それだけでなく安価な時計、電化製品、おもちゃ、紳士用品、日用雑貨と幅広い品ぞろえで、毎日が巨大な路上フリーマーケット状態だ。女人街は外国人観光客にも人気が高く、香港土産によさそうな品もよく見掛ける。

香港の街角歩きは、いろいろな視点から楽しむことができる。路地裏にあるB級グルメ名店めぐり、路上に迫りだし食材が山と積まれているマーケットめぐり、そして歴史が階層的に混じり合う街道めぐりなど、自分なりの楽しみ方で香港の街を楽しんでもらいたい。きっと自分が知らなかった香港が見えてくることだろう。

CATHAY PACIFIC holidays

キャセイホリデーだから実現できる 夏のお得な香港パッケージツアー

ホテルセレクション

デラックス、スーペリア、そしてデザイナーズホテルの3つのカテゴリーから22件ものホテルをラインナップ。デザイナーズホテルには人気の「ランソンプレイス」も含まれています。往復とも好きなフライトでのご旅行が可能です!

香港逃避行 サマーキャンペーン

夏限定の『香港逃避行 サマーキャンペーン』が今年も登場。嬉しいホテルの特典も香港に拠点を置くキャセイホリデーならではの魅力的な品揃えです。

セレブな香港3日間

往復ビジネスクラスと豪華なホテルでこの夏休みは贅沢にすごしてみませんか? ザ・ペニンシュラをはじめ香港を代表する7つのラグジュアリーホテルを厳選して、東京発134,800円からご用意しました。

★ラインナップも増え、ますます便利なキャセイパシフィック航空正規割引航空券、そしてお得なキャセイホリデースペシャル格安航空券も好評販売中!

最新情報はCXスペシャルズで

キャセイパシフィック航空のEメールマガジン CXスペシャルズは、購読者限定のお得な運賃やキャセイホリデージャパンのパッケージツアーをはじめ、キャセイのサービスやキャンペーン、読者へのプレゼント情報など、盛り沢山の情報を毎月HTML形式のEメールでご紹介しているメールマガジンです。ぜひご登録ください。

登録方法 キャセイパシフィックのサイト http://www.cathaypacific.co.jp からトップページ「CXスペシャルズを購読する」にアクセスしてご登録ください。Eメールアドレスを入力するだけで、登録完了です。

ご予約・お問い合わせ:キャセイホリデージャパン株式会社 **03-3567-2840** (月～金 9:30～17:30 土日祝休)

FAX:03-3567-2863／24時間受付 ホームページからもお申し込みができます。 http://www.cathayholidays.co.jp